

# 脚折雨乞縁起

—「神殺し」の雨乞い— '11S 石垣 翔平

## はじめに

---

あなたは、生まれ故郷の文化や行事について調べたり、参加したりしたことはあるだろうか。地元をあまり知らないことで、あなたは大きな損をしているかもしれない。この記事をきっかけに、あなたが地元に対して興味を深めてくれれば幸いである。

## 脚折雨乞とは

---

この行事は、私の地元、埼玉県鶴ヶ島市で行われている古くからの伝統行事であり、国の無形民俗文化財に指定されている。4年に一度、オリンピックと同じ年に行われており、今年も8月5日に行われた。では具体的に何をするのか。火でも焚いてお祈りをするのか？ いやいや。



図1 龍神



図2 白鬚神社

この「龍神」(図1)が街中を練り歩くのである。全長約40メートルの巨大な龍のオブジェが、屈強な担ぎ手によって運ばれていく。白鬚(しらひげ)神社から出発し、約二時間かけて雷電池(かんだちがいけ)まで移動する。一般道も通行止めになり、道路の真ん中を龍神が進む異様な光景を見せる。

池に着くと、「雨降れたんじゃく、ここに懸かれ黒雲」と叫びながら周囲を回る。凄まじいのはクライマックスで、なんとこの龍神を解体してしまうのだ。解体された龍神は天へと上り、雨を降らせるという。

## 歴史

---

資料によると、江戸末期～明治時代から記録が残っている。

雷電池のほとりの脚折雷電社で雨乞いをすると、必ず雨が降ったが、寛永の頃に池を縮めて田を作ったため、いつしか池に住んでいた大蛇がいなくなり、雨が降らなくなってしまった。そこで、板倉雷電社の水を持ち帰り、降雨祈願をすると、たちまち雨が降り始めた。(1)

とある。その後、昭和 39 年以降行われなくなったものの、「脚折雨乞行事保存会」が結成され、昭和 51 年から再び執り行われるようになった。

## かみがバラバラになった記

---

この行事で作られる龍神は、作成段階だと「龍蛇」という呼称だが、出発前のお祓いにより「龍神」となる。つまりは「神」を模した存在となるのだ。それを何故、最後に解体してしまうのだろうか。

龍神とは雨や水を司る存在、荒ぶる自然の神である。それを怒らせれば、怒りの豪雨が降ると想像がつく。つまり、普通の方法で雨が降らないなら、神を怒らせてでも雨を降らしてやる、という苦肉の思いがあったのではないか。そこで、龍神を模したものを作って龍神の気を引き、それを破壊することで、あえて龍神を怒らせていたのではないか、と考えられる。(龍神が棲む池を汚すことで龍神を怒らせる、という説明もある)(2)

ちなみに、解体された龍神の破片(主にワラや紙細工)は担ぎ手が持ち帰る。龍神の頭の上の宝珠や、目を手に入れた人は幸せになれるらしい。

## おわりに

---

今年の脚折雨乞は、出発の儀式には立ち会ったが、体調の問題から池での龍神昇天は見る事が出来なかった。それでも、若者からお年寄りまでが一体となって楽しんでいる様子は、とても印象深かった。

雨乞いの要素は鳴りを潜め、お祭りとしてのイメージが強まってはいるが、あえて「雨乞い祭り」としないのは、古くからの文化や当時の人々の苦悩をくみ取り、継承するという意味でも重要なのだと思われる。

こんな大層な行事がなくとも、地元をぶらりと歩いてみれば、行ったことのない道や建物、イベントなどは必ずあるはずである。たまにはそんな地元文化に目を向けてみるのはいかがだろうか。

(1)脚折雨乞のパンフレットより抜粋

(2)ダイドードリンコ日本の祭り 2012 インタビューより